

鶴田町議会議員 視察研修報告 「総務経済常任委員会」



視察先 北海道上富良野町、恵庭市
期 間 平成21年8月25日(火)～27日(木)
参加者 澁谷光正、下山勝明、出町豊、當麻榮一、
新谷賢剛、三浦 勉 以上6人

△日本有数の広大な農地が広がる富良野盆地

今回の研修では、農耕の歴史を学ぶことができる北海道上富良野町と花のまちづくりで有名な恵庭市を視察してきましたので、その概要について報告いたします。

農業離れが進み、耕作放棄地が増加するなどの問題も起きています。そこで、農耕の歴史を学び、農業の重要性や食の大切さを後世に引き継ぐことが重要ではないかと考え、北海道上富良野町にある土の博物館「土の館」を訪ねました。

土の館は、平成4年7月に日本



△日本で初めて農業博物館として開館した「土の館」

で初めての農業博物館として開館しました。北海道農業の今日までの歴史の後半部分約60年ほどにかかわった農具や農機具、さらには国内外の土壌標本を展示する博物館で、北海道遺産にも登録されているといえます。道内に農機具を製造販売しているスガノ農機が自前で建設し、維持しながら無料で開放しており、北海道に根を張った中小企業の心意気を感じました。

館内には、古くから世界の農耕で使われていた鋤やスキ、プラウなど、当時の貴重な農具が多数展示されており、世界の農耕の歴史を目で感じることが出来ました。

また、農業の基盤である土を世界各地から採取し、標本にしたモノリス(10か国、115点)も展示されており、良い土をつくるた

めの方法やさまざまな土づくりの事例を見て、農作物の品質に大きな影響を与える土づくりの重要性を学びました。

そのほか、平成5年に建設された農機具伝承館「トラクタ博物館」には、国産第一号機をはじめ、世界各国から当時輸入されたトラクタが多数展示されていました。

土の館では、これらの展示物を利用した農業経営の研修や農耕の



△100年前に使用されていた蒸気トラクタ



△各年代で活躍したトラクタを展示している

歴史を楽しく知ることが出来る小学生向けの講座を開くとともに、農耕に関わる資料収集や食の大切さなどの啓発活動に努め、農業の重要性を後世に伝えようと取り組んでいます。

食料自給率が低いわが国は多くの食料を外国から輸入しています。世界では人口増加や農地不足などによって、食料不足が深刻な問題となっています。また、食の安全・安心も大きな問題となっており、日本各地で食育に関する取組が活発化するなど、食に対する関心が高まっています。将来を担う若者や子どもたちに農業の大切さを知ってもらい、担い手の育成確保に努めることが重要であり、そこにはまた農業で生活できる仕組みづくりという大きな課題が残っていると深く考えさせられた視察でした。



△それぞれの家にはきれいな花だんが並び

次に、われわれは恵庭市にある道と川の駅「花ロードえにわ」に向かいました。ここでは、花のまちづくりや情報発信の拠点としての取組について視察しました。

恵庭市は、道都・札幌市と空の玄関口・新千歳空港のほぼ中間に位置し、交通アクセスが良く、住宅地や学校、工業団地などの基盤整備が進んでいます。また、市の西側は恵庭岳や緑の森林地帯に覆われ、そこから漁川の清流が流れるなど、豊かな自然にも恵まれています。



△「庭」を感じさせる住宅街の通り

恵庭市という地名は、恵庭岳をアイヌ語でエエンイワ（鋭くとがった高い山）と表したことに由来するといわれており、明治39年に漁村と島松村が合併して恵庭村が誕生し、「恵庭」という表記が採用されたことから「恵まれた庭」というイメージがつき、花のまちづくりにふさわしい地名となつてい

ます。

恵庭市の花のまちづくりの大きな特徴は、花を愛する多くの市民たちと企業、それから花の生産者の自主的な活動によるものがほとんどであるという点です。行政主導のまちづくりは、やらされている、手伝つてあげているという意識から、なかなか成功に至らないのが現実です。恵庭市には、町内会、老人クラブ、商店街、花づくり愛好会など地域ぐるみで花のまちづくりに取り組んでいるたくさん

の市民のほか、花と緑の工場づくりに熱心なサッポロビール北海道工場、花の産地形成のため努力してきた花生産者など、花のまちづくりの担い手がいっぱいいるそうです。

しかし、道央圏の中心に位置するという恵まれた地理的条件が逆に「通過するまち」と表され、まちづくりを進める上で大きな障害

となり、花のまちづくりや豊かな自然、さらには良質な農産物など、観光資源や地域資源になり得るものがたくさんありながら、十分に活用できていない状況であつたそうです。

このような状況の中、札幌市と室蘭市を結ぶ国道36号交流施設として道と川の駅整備事業が位置づけられ、一日の交通量が3万3000台という国道36号と漁川の交差点に、道路事業として道の駅制度を、河川事業として水辺プラザ事業を活用するなど、道央圏・北海道を結ぶ拠点として花ロードえにわを整備し、「通過するまち」から「情報発信するまち、たまるまち」への転換を図りました。

平成18年7月にオープンし、運営は社団法人恵庭観光協会が行つています。立地が市の中心部ということから市民の利用率が際だつており、さらに道内で最も交通量が多い幹線道路沿いという好条件もあり、年間約90万人もの入館者があるそうです。恵庭市の情報拠点としての役割はもちろんのこと、周辺市町村のさまざまな情報も質、量とも充実させており、相互に誘導し合う広域連携観光拠点としての役割も果たしています。

駅内には焼きたてパンを販売するベーカリー工房もあり、市民を中心に売り上げが好調で、年間1・5億近くもあると説明があり

ました。敷地は、あるじやで言うならばコーヒーを売っている場所ぐらいの広さであり、とてもお驚かされました。

花のまちづくり団体や市民との連携も進めており、駐車場や河川敷地にある市民花壇の植栽なども行つています。視察当日も、駅敷地内に市民参加による手づくりのガーデンを造園中であり、とても見事な出来映えでありました。

また、隣接する恵み野地区の市民による恵み野花のまちづくり連合会の活動が評価され、平成16年度都市景観大賞・美しいまちなみ大賞を国土交通大臣より受賞したということ、われわれは恵み野地区にも足を運びました。駅前通りや商店街、住宅街など、至るところに花が植えられているそうですが、団地の中の通りにも100mまでの距離に、それぞれに華やかで手入れの行き届いた洋風庭園がありました。市が分譲する際に、ガーデンを造ることを条件に大きめの区画で分譲したそうで、この通りは異国の風情がただよい、北海道に似合う光景であり、眼福に浸ることが出来ました。

花は、四季折々に人々の目を楽しませ、心にやすらぎとるおいを与えてくれます。また、花を植えて育てるといことは、生命の大切さを知ることにもつながります。住民主体の花のまちづくり、そして住民と連携をとりながら情



△駅内で販売されているさまざまなハーブ類



△テラスから望むガーデン／道の駅えにわ

報発信する道の駅、この二つがうまくかみ合っている恵庭市の取組はとても勉強になり、わが町においても活用できる部分はあるのではないかと感じました。

以上、簡単ではありますが、総務経済常任委員会視察研修のご報告とさせていただきます。